

特集 三重の山川・里・海を守る

南北に長い三重県では、多彩な自然環境が見られます。山々に降り注いだ雨は大地に染み込んで川となり、里山や里地などを潤しながら流れ、やがて海へと注ぎ込みます。それぞれの自然は密接につながることによって多様な生物をはぐくみ、私たちの暮らしを支えてくれています。今回は、地域の自然を守り、次世代へと引き継ぐために活動している6グループをご紹介します。

※各グループが行うイベントや行事活動に関しては、日時、場所、料金受け入れ方法や人数などに違いがあり、状況に応じて延期・休止する場合があります。事前に必ずご確認ください。

取材・文……中村真由美・中村元美・堀口裕世・中川絵美子
撮影……梅川紀彦・尾之内孝昭
ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

子どもたちが思いっきり遊べる、再生可能な里山づくり

いなべの里山を守る会 「いなべ市員弁町・大安町」

「いなべ市内には多くの里山がありますが、人が入れないほど荒れているのが現実です」と話すのは、辻久好さん。山と集落の間に位置する里山は、特有の生態系を形成し、木材や食料などの資源を供給する重要な場所といえます。里山の状況に危機感を抱いた辻さんが、「いなべの里山を守る会（会員数17人）」を結成したのは平成24（2012）年のこと。これまでに員弁町と大安町内の4か所で、倒木の伐採や草刈りなどに取り組んできました。

現在、主な活動場所は、大安町の両ヶ池に隣接する一画。地域の保育園児の野外学習の場として、子どもも大人も一緒に遊べる場として、子どもも大人も一緒に遊んでいます。また、季節に応じた学びと遊びを融合した遊びの会も開催。昨年春には、イタドリなどの植物の名前や特徴を元教師から学ぶ「春探し」「夏休

み期間中には「竹トンボ作り」やガールスカウトによる「ポップコーン作り」を行いました。

11月に実施した「里山の秘密基地づくり」では、午前と午後の2回にわたって約30人の小学生と保護者が参加。開始早々、「やったー！いいもの見つけたよ」「こっちも切つてよ」「窓も作りたい」と、あちこちから弾んだ声が聞こえてきました。

ノコギリで切った竹をテントや小屋のように組んで植物の蔓で縛ったり、竹の葉を重ねて壁にしたりと、思い思いの秘密基地が完成し、皆さんの表情も満足そうでした。

「私たちの活動に終わりはありません。現在、近くの車体工場の従業員も手伝ってくれますが、若い世代や子どもたちに受け継いでもらうことが大切だと思っています



自生する竹を切って秘密基地の材料に



里山整備の様子



辻 久好さん

す」と辻さん。子どもたちが思いっきり遊べる里山づくりのため、同会の地道な活動は今後も続きます。

お問い合わせ
「いなべの里山を守る会」
TEL 090-3956-0013
辻久好代表



「いなべの里山を守る会」の皆さんと「里山の秘密基地づくり」午前の部参加者

メダカが泳ぐ自然学習の場、
憩いの場を子どもたちへ

智積自然の会

【四日市市智積町】



「泥んこ綱引き大会」※

平成11(1999)年、四日市市智積町大字初瀬の地に、ある学校が誕生しました。6月には周辺地域の各自治会に加えて、幼稚園児などが参加して開校式が行われた学校の名は、「初瀬ビオトープの谷メダカの学校」です。ビオトープとは、特定の生物群集が生き生きできる環境条件を備えた最少の空間単位のこと。清らかな水を湛えた大小4つの池には、数千匹のメダカをはじめとして、ヤゴ、アメンボウ、タニシなどの水生生物が生息し、夏期にはハスやホテイアオ

イ、コウホネなどの花が咲き誇ります。

開校から25年が過ぎた現在でも、背後の一生吹山山頂までのハイキングや散策を楽しむ人々の休憩場所として、周辺地域住民の憩いの場として親しまれている

同校を造成し、継続して整備を行っているのは、地域住民有志で結成された「智積自然の会」の皆さん。毎月第2日曜日の午前中に草刈り作業を行うと伺い、昨年11月に訪ねると、草刈り機を手にした皆さんが作業を始めるところでした。



昨年11月の草刈りに参加した「智積自然の会(会員数40人)」の皆さん



伊藤 隆夫さん

「休耕田に竹林が浸食して荒れ放題だったので、本来の緑豊かな姿に戻して子どもたちに引き継ぎたいと話合ったのがきっかけです」と、会長の伊藤隆夫さん。その時に参考にしたのは、以前から交流のあった多気郡多気町(旧勢和村)のビオトープだったことなどを教わりながら、入口から坂道を上っていくと80メートル程度進んだところで池が出現。池の上や周囲には遊歩道が整備され、藤棚やベンチも設置されていました。フジの開花時期には、親子連れがお弁当持参で訪れるというのも頷けます。

この日は急に寒くなったためか、メダ



遊歩道が整備されたビオトープ



草刈り作業の様子



「メダカの放流」※



「メダカ・マルシェ(縁日)」※

カの泳ぐ姿は見られず、聞こえてくるのは、草刈り機の運転音のみでしたが、2年に1度開催の「メダカの学校・ちしゃくの自然ふれあいまつり」では、周囲一帯に人々の歓声が響き渡るといいます。昨年7月に開催された際の内容は、「メダカの放流」「ビオトープ・宝さがしゲーム」「泥んこ綱引き大会」「メダカ・マルシェ(縁日)」など。中でも一番盛り上がるのは「泥んこ綱引き大会」。小学生以下の子どもたちはもちろんのこと、中高生や大人たちも泥んこになってハシヤグため、「元氣すぎるから大変や」と話す伊藤さんの表情も和らいで見えまし

た。なお、大会の優勝賞品は「智積のお米」60キログラムで、町内を流れる名水「智積養水」で育てた自慢のお米だと伺いました。

やがて季節は水温(ぬ)む春、「初瀬ビオトープの谷メダカの学校」を訪ねれば、メダカたちが元気に泳いでいることでしょう。そして、第2日曜日には、黙々と草刈り作業に励む皆さんの姿が見られるでしょう。

お問い合わせ

「智積自然の会」

TEL090-7021-5716

伊藤隆夫会長

水辺を守る小さな「魚博士」が続々

魚と子どもものネットワーク

【亀山市栄町】



「どんな魚に出会えるかな」…鈴鹿川河口にて

亀山市を基盤に活躍する「魚と子どもものネットワーク」。鈴鹿川河口（四日市市）での活動にお邪魔しました。幼児から小中学生の子どもたちを高校生がリードし、大人と一緒にゴミを拾います。ゴミ拾いの後、魚やカニなど水辺の生物を捕り、水槽に入れての学習会。よく見

て学んだあとは、生き物を川に戻します。今回はゴミが多いのですが、積極的な順序を変えたそうですが、積極的にゴミを拾い、目を輝かせて魚を見つめる子どもたちの自主的な動きが印象に残りました。

この会の代表の新玉 拓也さんは、名



「この魚は何か？」と萩さん



代表の新玉 拓也さん

古屋大学の大学院で環境保全について研究し、琵琶湖で魚を守る活動をしていた頃、幼なじみで2歳年下の峯和也さんと再会しました。当時、彼は三重大学や大阪芸術大学で都市計画やビオトープなどの視点で環境について学んでいたといえます。幼い頃、実家近くの川などで一緒に遊んでいた二人。「会って話が弾み、水辺の生き物が見られなくなり、川で遊ぶ子どもが少なくなった現状を何とかしたいと、平成20（2008）年、この会を立ち上げました」。

に入ったという中学生や、カニの種類をたくさん知っている小学生など、小さな「魚博士」が、たくさん生まれているようです。



ゴミ拾いも一生懸命

池干しをして生態系を保全する取り組みや、「鈴鹿川探検隊」と銘打って河川の清掃など水辺の環境を守る活動と並行し、子どもたちに水辺での楽しみ方や生き物についての知識などを伝えています。「体験してもらって、子どもの頃の楽しかった気持ちを伝えたいんです。そこから、もっと詳しく知りたいという意欲がわいてくれると嬉しいですね」と新玉さん。若者たちが熱い思いに駆られて始めた活動は15年を経て、その思いはしっかりと次世代に伝わっています。

「小さい子には、海や川で遊ぶ楽しさと一緒に、その怖さも伝えたい。ぼくらの活動を見た人には、大人が排出したであろうゴミを子どもたちが拾っているという現実について考えてほしい」と語るのには、「魚と子ども kidsクラブリーダー」として子どもたちを率いる萩 琉稀さん。この活動に参加したことから水辺の生物に興味を持ち、環境にも問題意識を持つようになったという高校生です。他にも、この会での活動経験から科学部

一方で、会では里山の管理にも関わっています。「子どもの頃の通学路に『亀山里山公園みちくさ』という自然公園が出来たことをきっかけに、行政と掛け合い、昆虫や植物などの活動をしているグループや地域の人などに呼びかけて、『亀山里山公園みちくさ管理運営協議会』を立ち上げました。こちらは、峯さんが会長を務め、春から秋は月に1度、『里山塾』を開いて、動植物について学ぶ講座を行っています」と新玉さん。

他にもメンバーは、シンポジウムや講演会、研究会などで啓発活動や研究発表を重ねたり、環境教育やまちづくりなどのコーディネートとしても活躍して



たくさんのゴミと記念撮影。「滝沢ごみクラブ2023ごみフェス」ののぼりとともに。今回のゴミ拾いは、5月に「滝沢ごみクラブ」と連携して行った企画を引き継いだもの。

お問い合わせ

「魚と子どもものネットワーク」

TEL 090-1478-4756

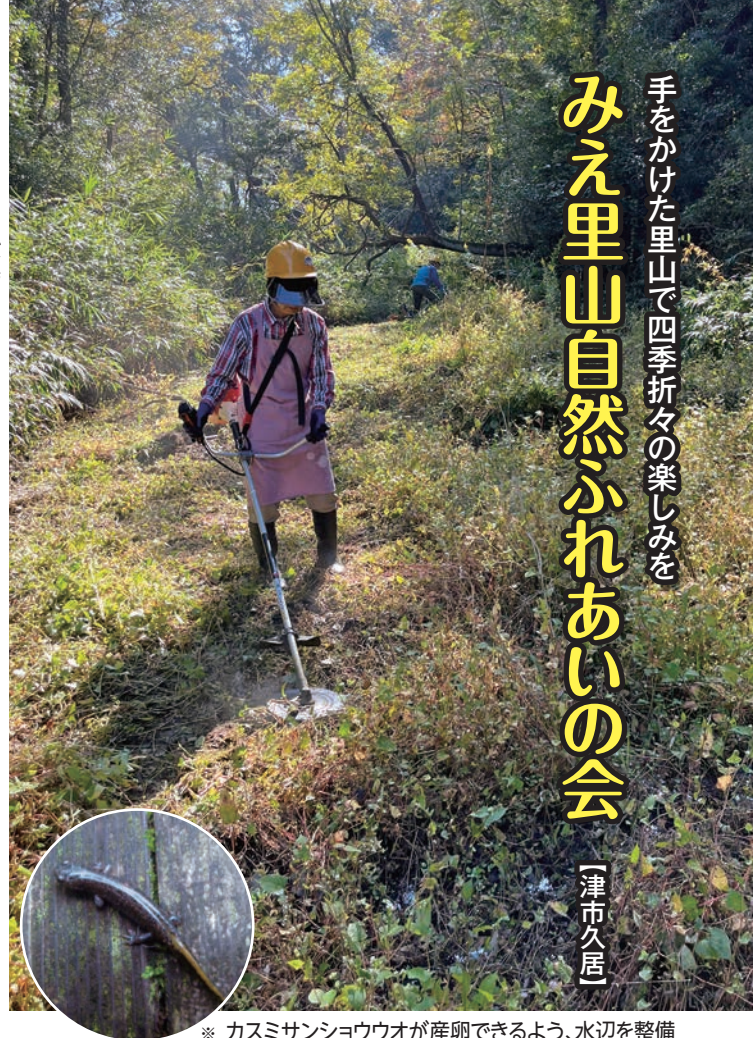
新玉 拓也 代表

います。「本業との両立など大変なことは多いのですが、何よりも、自然環境の現状を、少しでも多くの人に知ってもらいたいのです」。真摯な思いが精力的な活動の原動力です。

手をかけた里山で四季折々の楽しみを

みえ里山自然ふれあいの会

【津市久居】



※ カスミサンショウウオが産卵できるよう、水辺を整備



事務局長の井上 啓さん

「いすね」。
お話を聞きながら林の中を歩くと、木立の間に造られた広場や果樹園などがきれいに整えられ、手入れが行き届いていることに驚かされます。
「週三回、毎週月、水、金曜日に整備などを行っているんです。1万1千坪という広さですから大変なんです。が、こまめに手を掛けないとあっという間に荒れてしまうんですよ。草はすぐに伸びてしまいますし、台風が来れば倒木もありますからね。整備以外にも、年間10数回のイベントを行っています。」

津市久居の「柏尾学習林」は、住宅街の近く。広大な森林を背景に、人の手が加えられたのびやかな空間が、訪れた人を心地よく迎えてくれる里山です。ここを管理運営しているのは、「みえ里山自然ふれあいの会」。事務局長の井上 啓さんにお話を聞きました。

「法人の設立は平成9（1997）年で、初めは『NPO三重の里山を考える会』という名称でしたが、15年目に『NPO法人みえ里山自然ふれあいの会』に変更しました。活動は今年で26年目で、私も参加してから20年余りになります。現在の会員は60人程で、男女比は半々くら

は面白くありませんし、会員以外の方にもこの場所のことを知ってほしいと思って始めました」と井上さん。

そのために果樹を植え、キノコや山菜を育て、虫たちが成長しやすい環境を整えています。ほかに、ササユリの群生地やカスミサンショウウオの産卵地の整備、渡りをする蝶・アサギマダラが立ち寄るためにヒヨドリバナやフジバカマを植えるなど、花や生き物の命を守るための地道な努力が続けています。環境のバランスが崩れると消えてしまう危うい命です。

「もともと、里山というのは、集落の人

たちの生活の糧を得る場で、人に必要な場所だったんです。でも今はそうではなくなり、荒れてしまったり、なくなったりしているでしょう。みんなで力や知恵を出し合って、里山を整備し、守っていきたいと思っています。サクラやフジ、ハンゲショウなど、四季折々に花も楽しめますし、果樹のほかドングリやアケビなどの実もあります。蝶や小鳥もたくさん飛び交っていますね。自然に害を加えない配慮はしてほしいし、一人ですべての虫を捕るようなことはやめてほしいですが、会員でない方たち、子どもさんにも大人の方にも、気軽に立

ち寄って、楽しんでもらいたいと思っています。」

『里山の声』という冊子も、ウェブ上や冊子で発行。行けば爽やかな気持ちになれる、人にやさしい学習林です。

お問い合わせ

「みえ里山自然ふれあいの会」

TEL 090-1744-8457

井上 啓事務局長



冊子『里山の声』※



爽やかな「ふれあい広場」



サツマイモの苗を植える※



カブトムシやクワガタムシがいっぱい※



森の中でコンサート



掘ったサツマイモを焼き芋に※

豊かな海を取り戻す
県境を超えたソーシャルイベント

22世紀奈佐の浜 プロジェクト委員会

〔鳥羽市答志四日市市〕



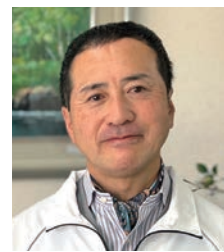
「第11回奈佐の浜プロジェクト」でのゴミ回収(令和5年10月8日)※

奈佐の浜は鳥羽市の離島、答志島にある砂浜です。この浜で毎年10月の日曜にゴミを回収するソーシャルイベントが「22

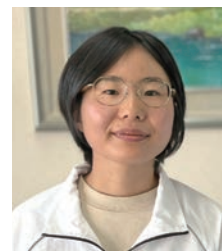
世紀奈佐の浜プロジェクト」が設立され、伊勢湾・三河湾の流域・沿岸である三重県、岐

世紀奈佐の浜プロジェクト委員会」の主催で行われています。平成24(2012)年から実施され、令和5年も150人の参加がありました。伊勢湾に浮かぶ答志島は、木曾三川から流れ込む栄養豊富な山の水や、黒潮がもたらす豊かな漁場がおいしい海産物をたくさん生み出し、眺望も美しい島ですが、潮流により年間数千トンの漂着ゴミが押し寄せてきます。島の住民や漁業関係者がゴミを回収していますが、拾っても次のゴミが流れ着くのが現状です。この漂着ゴミの問題に対し、「奈佐の浜プロジェクト」が設立され、伊勢湾・三河湾の流域・沿岸である三重県、岐

阜県、愛知県の各地から自然愛好家や環境活動グループが参加し、清掃活動に取り組んでいます。三重は「四日市ウミガメ保存会」が事務局を引き受け、保存会会長の下田菜生さんが代表を務めています。清掃に関わるだけでなく、参加する学生が現地です。インタビューを取って、「奈佐の浜プロジェクト」のユーザー動画を作ったり、若い人の力で活動をSNSで発信しています。



山田 和幸さん



代表の下田 菜生さん

でも減り、企業も環境問題に取り組むようになりましたが、ゴミを回収することはできても、次々と流れてくるのが現実です。「海に流出したマイクロプラスチックの問題も出ていて、全ての回収は困難です。海のゴミをゼロにする難しさも感じています」と下田さんは課題と向き合います。

「奈佐の浜プロジェクト」は、令和5年6月の第25回日本水大賞にて、これまでの実行力、継続力が評価され、市民活動賞を受賞しました。清掃活動後に環境学習会を開いて子ども向けのフィールドも用意するなど、次世代に繋げていこ

うとする姿勢に共感が集まりました。また下田さんをはじめ、岐阜代表は下田さんと同い年、愛知も23歳と、世代交代がうまくできていることも評価されました。大学生で参加し、卒業してもサポートで入ったり、体制がしっかりしています。

「四日市ウミガメ保存会」の設立は平成21(2009)年1月。現在20人ほどの会員がいて世代は20代から80代と幅広く、毎月第1日曜日午前8時から四日市市楠町吉崎海岸の清掃活動には、年間延べ2400人の参加があります。会の名前と活動は広く知れ渡っています。清掃活動は約1時間、その後、自然に関する勉強会や月によってイベントも開催しています。かつては親子連れの姿が多かったようですが、今は高校生の参加も増えています。また「進学で離れることはあっても帰省ついでにと



交流会で各県から参加の学生が意見交換※



子どもたちは漂着物でフォトフレーム作り※



奈佐の浜での清掃活動に150人ほどが集まる※



第25回日本水大賞表彰式※

か、車の免許をとったから走ってきたよ

とか、近い世代の人たちが来てくれます」と下田さん。ボランティア活動が、故郷を想うみんなの戻って来れる場所になっているようです。

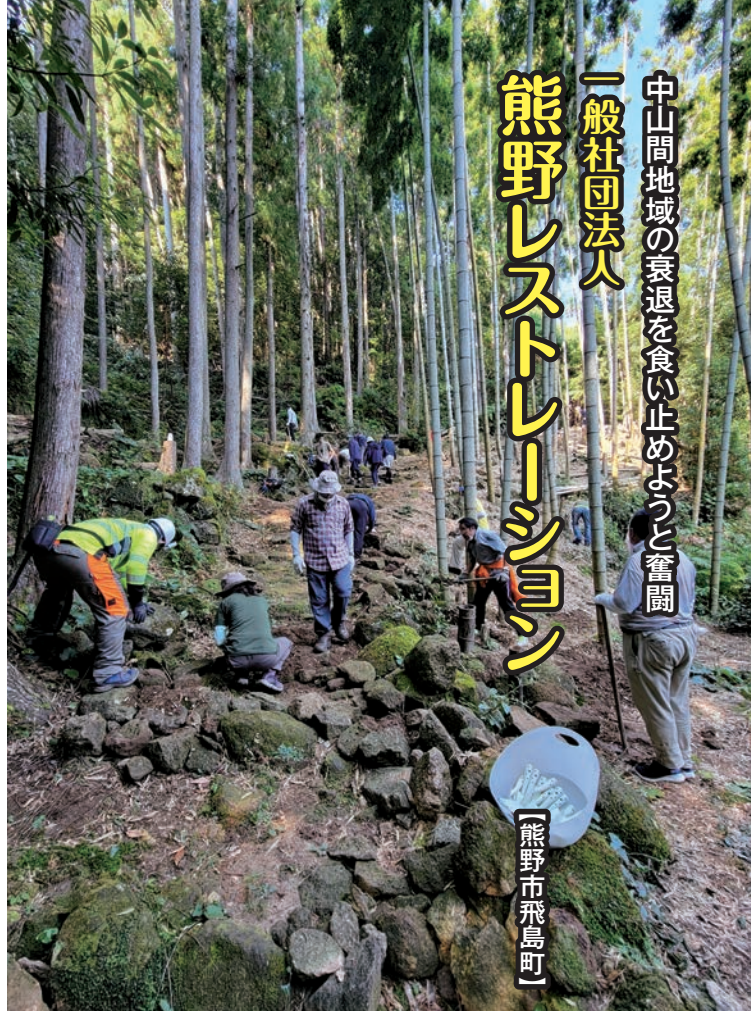
お問い合わせ
「22世紀奈佐の浜プロジェクト委員会
三重事務局」
TEL 090-3951-5881
山田 和幸副会長

※印の写真は取材先から提供していただきました

中山間地域の衰退を食い止めようと奮闘 一般社団法人

熊野レストレーション

【熊野市飛鳥町】



熊野古道・大吹峠での景観保全活動※

発足のきっかけは平成23(2011)年9月の紀伊半島大水害。大型台風により、湿った空気が長時間にわたって紀伊半島に流れ込み、山沿いを中心に広い範囲で記録的な大雨をもたらしました。「中山間地域の田舎でひとたび災害が起きてしまうと、どうしても衰退が激しく

なる。それを少しでも食い止めることができた」と「熊野レストレーション」代表理事の端無 徹也さん。自身の故郷・熊野市飛鳥町でも被害を受けました。各地の災害発生時にボランティア活動の経験があった端無さんは、森林里山保全活動を主に、災害発生時はテクニカル



代表理事の端無 徹也さん

ボランティアとして活動しようとして立ち上げました。現在のメンバーは30代から70代までの35人。3分の1は地元、東紀州在住ですが、ほとんどが関東から九州の各地に散らばり、遠方から駆けつけてくれます。三重県とも災害支援協定を結び、県内でSOSを求める声があれば、生活に関わる災害木の処理を中心に、現場へボランティアを派遣し、市民活動ネットワークと状況を共有しています。また台風の予報が出れば、現地でしかわからない情報をフェイスブックで案内しています。

熊野古道サポーターズクラブ法人会員でもあり、熊野古道伊勢路の大吹峠、逢神坂峠の2か所で景観保全活動を行っています。月に1度の見回り、台風などにおける被害を情報収集し、風倒木や落ち葉が石畳を覆ってしまった場合、復旧作業に当たります。「峠道を機材を背

負って登り、チェーンソーなどは資格を持つ者が相応の装備で対応しています」と端無さん。

災害時のほか、耕作放棄地の有効活用も飛鳥町周辺で行っています。「放っておけば、シカやイノシシ、サルといった獣害がひどくなってしまいます。この地域では柑橘や梅以外での農業は簡単ではありませんが、育てる楽しさがあります。アドバイスしてくれる人も今な

験農場「飛鳥熊レス村」を運営。里山林の保全や、グリーンツーリズムコーディネートとしての森林体験活動、また、森林里山保全活動の一環で、ロープを使って安心・安全に自分の力で木登りする新感覚のアウトドアアクティビティ・ツリークライミング、LEAFプログラムを取り入れた環境教育といった森林レクリエーションを体験できます。里山保全のために、支障木を伐る「株式会社熊野支障木伐採サービス」も設立。災害復旧の依頼だけでなく、建物や家屋に覆いかぶさる支障木の伐採依頼や相談が増えているようです。

また、各地の花火大会などでゴミの分別ボランティアを担ったり、関西支部では能勢高原ドローンフィールド周辺(大阪府)の遊歩道景観整備を継続し、これまでの活動を生かした災害支援をテクニカルボランティアとしての要請で、県外へ出掛けることもあります。立ち上げから11年。地道な活動が、美しい里山の風景を保ち、衰退の先送りの手本となっているようです。継続は力

お問い合わせ

一般社団法人熊野レストレーション
TEL 090-8658-6601



手入れされた飛鳥の集落※



熊野古道での見回り※



耕作放棄地での田植え※



紀北町燈籠祭でのゴミ分別※



能勢高原の遊歩道景観整備※